

『麻雀放浪記』をみて

西ノ蘭伸昭

学ランの「坊や」は「ドサ健」に連れられ賭事の世界へと足を踏み入れる。やがて「ママ」の雀荘で外国人たちを相手に卓を囲むようになる。青臭い「坊や」は、無謀を顧みない男の戦場を生きてゆくなかで、自らを男たらしめていった。

まだ性的にニュートラルな子供が、「男」という性別を獲得する、そんな物語だ。

「坊や」は「ママ」と肉体関係を持ち、ふたりで組んで稼いでいこうと約束する。「坊や」が卓に座り、「ママ」が他の人の牌をみて合図を送る。「ママ」から貰った、ルーレットのついたライターで煙草に火をつけ、合図を送る。「坊や」は慣れない煙にむせかえってしまう。

やがてひとりで雀荘をめぐって稼げるようになった「坊や」は、「ママ」の家に赴き、

「ママが好きなんだよ、女房にしたい」と打ち明けるも、

「子供だから好きだの嫌いだのいうの」とあしらわれてしまう。

また後日行ってみると、「ママ」の夫が警察沙汰になり、すでに家を引き払ってしまっていた。

「坊や」は「ママ」から貰ったルーレットつきのライターで煙草に火をつけようとしたが、もうきれてしまっていた。使えなくなつたライターを道に放り投げる。

「ドサ健」が「出目徳」にリベンジを果たすべく行われた最後の麻雀の途中、「出目徳」は死んでしまう。そこで「坊や」が見たものは、敗者が身包みを剥がされる姿であった。

勝負とは、勝った者がさらに高みへと昇っていくというものではなく、負けた者が墮落していき、勝った者はなんとかその場に踏みとどまるというだけなのだといった、「大人の男の真理」を目の当たりにしたのであった。